



特務捜査ハラスメント

絶頂酔い花デビュー

立ち読み版

プロローグ ウイスキーが似合う女

FILE 1 秘書暴行

FILE 2 仕組まれた罠

FILE 3 満淫劣車、姦状線

FILE 4 淫獄の酒宴

エピローグ

006

048

095

141

194

252

登場人物紹介

Characters



かなでの は すばる

奏乃葉 昂

特務4課のリーダーを務める女性。優等生のお嬢様タイプで物腰も穏やか。



すずしろ まこと

錫城 真琴

国防大学の現役学生。研修の一環として新警に配属され、行動を共にしている。

ろくおんじ いおり

鹿苑路 伊織

昂とは高校時代からの友人。父親はロクオンジ・シティ・バンクの総帥を務める。

さいとう れみこ

斉藤 怜美子

昂たちの上司。彼女たちの行動に理解を示す。

（触って何が楽しいのよ？ さっきから）

ベッドインの経験がない昴は、男どもの異様な触り方に注意力を乱されていた。胸だけでなく、腰の括れや太腿の内側もまさぐられ、女体曲線を取り出されていく。

少なからず恐怖で強張っているはずの肉体が、こそばゆさに襲われた。柔肌が火照り、彼らの手の届かないところでも震えを起す。

「ひあつ？ そこはだめ！」

高島のものとは別の手が、真後ろからストッキングの中央に差し掛かった。反射的に太腿を閉じ合わせても、お尻のラインを左右均等に撫でられ、吟味される。

ミニスカートに潜り込んでから次の動きが、まったく読めない。

「いい反応もできるじゃねえか。もつと気分出せよ」

「非常識よ、あなたたち？ この、し、しつこいったら！」

昴の表情が赤々と羞恥に染まり、反抗の言葉も切れが鈍った。高島を睨んでいたつもりは、下つ端の連中を警戒するばかりになって、唇には熱っぽい吐息が滞留する。

がちやがちやと手錠を擦るだけでは抵抗にならない。

（変な触り方ばかり……いやらしい！）

自慢に思ったことはない、といえど嘘になる豊満な肉体に、男どもの下品な欲求が殺到した。軽蔑すべき悪戯が、自分の身体中で再現されてしまう。

肉付きのよい太腿の付け根となるお尻も、張りのある曲線をストッキングに浮かび上が

らせた。谷間の食い込みにはショーツの形が覗け、男たちの視線を誘い込む。

「こんなケツして、取り締まりかあ？ 犯罪を助長してんじゃねえの」

熟した林檎みたいな形のお尻が、紅茶色のストッキングを引き伸ばしていた。太腿のわずかな動きが生地を引っ張り、食い込みの衣擦れをずらす。

「こっちも撮影会だ。おら、もつとケツあげろ！」

「んいいつ？ くるし……はあ、どこを撮ってるのよ、あなた」

イエローテープで無理やり吊るし上げられ、背伸びを余儀なくされた。おねだりみたいにお尻を突き出す屈辱的なポーズを、せせら笑いとともに激写されてしまう。

(いつまで触ってるのよ、こいつら！)

全身愛撫に揉まれながら、昴は苦し紛れにのけぞった。肉体のあちこちで奇襲を受け、どれが誰の手なのか見当もつけられない。

「そうじゃ、特務4課にはいい女を揃えて、毎晩接待させようかのオ？」

「誰がそんなこと、んくう、い、いい加減にしてっ！」

眉を顰め、全身の感覚を断ち切ろうにも、数が多すぎる。彼らの脂ぎった視線は、女の多感な羞恥心をいくらかでも逆撫でした。

抵抗が弱くなつたところでハサミを近づけられ、昴はごくりと息を呑む。

「……まさかっ？ ちよつと、それで何を……」

ハサミは胸の谷間でブラジャーを切断してしまった。赤色の生地がぱらりと剥がれ、た

わわに実ったフルーツを裸にする。

男たちの歓声があがり、フラッシュも瞬いた。

「たまんねえ！　これがお嬢様のオッパイかあ、やべえ、ヨダレが出ちまう」

「見ないで、って……はあ、い、言ってるでしょう？」

拘束状態では胸の露出をどうすることもできず、顔を背けるしかないのが悔しい。恥ずかしい。屈辱に耐えかねて肩をわななかせ、手錠の先で拳を握り締める。

（集団でよってたかって最低だわ。こんなやつらにこれ以上、好き勝手には……）

羞恥で荒れる心に喝を入れたつもりでも、顔から熱は引かなかった。

艶やかに照り返る双乳の先端で、淡いピンク色の突起がびくびくと疼く。小指の先ほどの大きさで、赤ん坊が啞えやすい形だ。

「これで何人くらい男をたぶらかしたんじや、ええ？　ぐひひ！」

正面の高島は汗ばんだ巨乳をしげしげと眺め、揉む力に波をつけた。

膨らみの麓を搾られると、柔らかさが一斉に先端へと向かう。

「たぶらかしてなんか……んふあ、するわけ」

実り豊かな巨乳が男性に好評であることに、以前から自覚はあった。言い寄ってくる男の半数は、この胸を目当てにしていたのかもしれない。

ぐにぐにと転がされる乳玉が、窮屈な谷間でネクタイを呑み込む。なまじネクタイが綺麗に締まっているせいで、大胆な露出は気取った挑発のように見えてしまった。

「ハメたら揺れまくるんだろーなあ。おい、男はいるのかよ？」

「……あなたたちには、はあ、関係のないことでしょう」

無神経な質問を投げつけられ、昴は唇の中で悔しさを噛み締める。

決して交際のきっかけがないわけではなかった。興味もあった。けれども特務官になるという目標を優先したのがために、一度も付き合ったことがないのである。

久しぶりの恋愛も空回りに終わったばかり。

「こういう女はなあ、ベッドで逆に男を飼い慣らすことを知つとるんじゃよ。タチが悪いぞ？ 男の性欲を逆手に取ってきよる」

まだ男を知らない初心な肉体を、狡賢い女の武器と解釈された。

「しないわ！ わ、私は……」

侮辱に苛立つて反論しようにも、かえって処女であることの告白になりかねない。

二十三歳にもなると、セックスの経験がないことは一種の劣等感だった。同性の友人らにも「人並みに」と誤魔化している。

（こ、怖がっちゃだめよ。こいつらにだけは）

ここでバージンを知られたら、男どもの下品な興味を助長してしまうに違いない。

昴が口を開かずにいる間も、艶かしい肉体をまさぐられ、イエローテープでぐいぐいと締め付けられた。男の手が股間へと接近すると、反射的に震えがくる。

「そんなに真面目に仕事をしたけりゃ、AVの仕事でも紹介してやろうか？ 4課のエロ

リーダーさんよお。そのほうが市民も喜ぶぜ」

特務4課を目の敵にしている連中は、癩に障るほどつけあがっていた。カメラが昴の股座を、スカートの中を下からのアングルで撮影する。

「どこを撮ってるのよ！ ……変態ッ！」

蹴りつけたくても、テープで拘束されていては不可能だった。

別の男が昴の銃をくるくるとまわし、撃つふりで遊ぶ。

「一丁前にカスタムメイドか？ 4課だけでいい武器揃えやがって」

爪を立てられた拍子にストッキングが破れ、ぴりぴりと伝線した。あられもない太腿が水玉模様となって食み出し、これまで薄生地に通けていた、肌の白さを露にする。

「ちよつと？ いやよ、やめてつたら！」

さらにスカートを捲り上げられ、紐で括っただけのショーツも目撃された。

昴の意志とは裏腹に、ストッキングの裂け目が中央で広がる。ブラと一式のショーツも彩色の強いエナメルレッドで、秘部を心許なく保護していた。

「スケベなパンツ穿いてやがるな。変態はどつちだよ、それとも4課の支給品か？」

「好き勝手言わないで。あなたたちに盗まれたりしなければ……」

およそ昴のセンスとはかけ離れた、ベッドでの実用性を重視したらしいデザインだ。胸のサイズが大きくなると、日用品として無難な下着を見つけるのは難しい。

そんな女の事情など知るはずもない男たちが、順番に昴のショーツを観察する。

「これは着けてるほうが犯罪だな。痴漢に遭っても文句言えねえぜ」

投げつけられる侮辱の数々に昂は顔を赤らめた。股間への視線を刺さるように感じ、ストッキングの裂けた太腿を擦り合わせる。

「奏乃葉君はお疲れのようじゃな。ふっひっひ、どれ、そこに座らせてやれ」

高島の命令ひとつでソファに投げ込まれた。仰向けの体勢から自力では起き上がることができず、上から視線で男どもの嘲笑に囲まれ、見下ろされる。

「俺らをナメてつから、こういう目に遭うんだよ。勉強になるだろ？」

「ふざけないで……こんなことして、くう、ただで済むと思っていたら大間違いよ」

それでも特務4課のリーダーは勇ましく彼らを睨みあげ、抵抗を続けた。拳銃さえあればと、つい人差し指で引き金を求めてしまうのが歯がゆい。

官長はいけしやあしやあと葉巻を噛み、昂の反抗的な態度を窘めた。

「まったく。奏乃葉君は強情な女じゃのう……もつと恥ずかしい思いをせんとわからんようじゃ。お前たち、脚を広げさせろ」

男どもが数人掛かりで美人特務官を取り押さえ、蟹みたいな開脚を無理強いする。

「きゃあああッ？」

そのせいでストッキングはさらに伝線し、赤いショーツを曝け出した。下着にしては股上が浅く、頭髮のように線の細い性毛が食み出してしまっている。

「どこまでいやらしいことを……はっ、離しなさい……」

怒号のつもりが声は上擦り、尻すぼみになった。恥ずかしさが怒りを上まわり、必死に眉を吊り上げても強がりにはかならない。瞳が無意識に男のいない方向を探す。

(ここで私が屈したら、特務4課は……けど)

華麗なほど大胆に開かれた股間は、濃厚な色気を溢れさせていた。シヨーツの三角形では隠しきれない昂のプライバシースポットに、下品な視線が集中する。

「どれどれ、ワシが品定めしてやろう」

さつきまで葉巻を弄っていた高島の人差し指が、ストッキングの裂け目に差し掛かった。もったいぶった手つきで指先を迷わせてから、股布を脇にずらす。

(……まさかっ?)

暴かれたことが俄かに信じられなかった。不特定多数の視線が股間へと集まり、最後に昂もそれを目撃し、いやいやと動揺する。

「ま、待って！ こんな犯罪だわ！ あなたたち、はあ、いつ、今すぐ……！」

シヨーツの股布は呆気なくのけられ、美人特務官の女穴を環視に晒していた。汗ばんで温もっていた股間が一時的に冷え、ぞくぞくと震えをもたらす。

見られる、という猛烈な恥ずかしさは、4課の気丈なリーダーさえ押し黙らせた。脚を閉じることは許されず、惨めな見世物姿をイエローテープで縛られる。

「ほほお、これはキレイなサーモンピンクじゃて」

男どもの勝手な感想が、清純な肉体を卑猥なものまで貶めた。サーモンピンクという高

島の一言が生殖穴には的確すぎる。

性毛は細やかに手入れされており、秘裂は清潔感に満ちていた。両脇を圧迫されるとダイヤの形に拡がり、多層構造の粘膜をぬめ光らせる。

これが昴の処女。

「使い込んでそうには見えねえな。おい、この穴で今まで何人とやった？」

「……ふ、ふざけたこと言わないで。あなたたちには関係ないわ」

秘裂からは大輪の肉唇がまろび出て、煮えた液をたたえていた。濡れる、という女の生理現象を嫌でも自覚させられる。

（やだ、又チャッて？ ……何かの間違いよ）

何も淫らな反応だけが濡れる理由ではない。生理に周期のある女性器は不安定で、それは女性である昴も熟知していることだった。

しかし感じる蜜の量は明らかに多い。

「こういう堅物ほど、変態御用達のオナニーでストレスを発散させてたりしてのお」

高島の指が女の入り口をこじ開け、侵入を試みた。

ずぶり、と潜り込んでくる異物感に驚き、昴は必死でかぶりを振る。

「ちよつと？ いじくらないで、えあはっ？」

だが肥えた指は昴の拒絶を意に介さず、鉤状に曲がり、急所を抉った。快樂神経が剥き出しとなった肉豆を弾かれると、痺れの電流に焼かれてしまう。

「いまいち反応が弱いようじゃが、ここなら……ふひひつ、逆らえんじやる！」

「そつ、そこは！ んはあ、弱いだよ、ほんとうに！」

刺激を受けてクリトリスがしこり、より擦れやすくなった。

性の知識に疎い昂でも、自慰ならここを弄ればよいと知っている。オナニーの機会など滅多にないとはいえ、失恋した自分を慰めた夜は、つい先週のことだった。

「おおつと、俺らも遊ばせてもらおうか」

感度を高めた肉体に男どもの手が群がり、火照った巨乳を取りあう。

特大の柔らかさを豊かな弾力とする乳玉が、谷間にネクタイを引きずり込んだ。桜色の突起もクリトリスと同様にしこり、疼きを漲らせる。

「あふう、待ちなさい……離してつたら、ンッ、こんな大勢で！」

ブラウスは残りのボタンも乱雑に外された。新たにイエローテープを巻きつけられ、挿収品のように扱われてしまう。

特務4課のリーダーとして、あまりに惨めな有様だった。気取るわけではない純粹な気高さを、卑怯者たちのせせら笑いで滅多打ちにされる。

（絶対に許さないわ。特務官がよつてたかつて！）

握り拳の中で爪が食い込んだ。同じ特務官として、彼らのまったく悪びれない態度に怒りを覚える。今日ほど感情を憤怒で昂らせたのは初めてだ。

しかし必ず臆病な羞恥心がまとわりつき、百パーセントの気を張ってられない。

「いつまで、つつ、続けるつもりよ？」

端正な顔は困ったふうに眉を傾け、唇から吐息を密かに逃がしていた。揉みくちやにされる肉体は汗で蒸れ、胸と股間が外気に晒されているのに、やけに熱い。

男たちのごつごつとしたてのひらが、女体曲線を這い上がっては滑り落ちた。とりわけ巨乳は人気があり、ひっきりなしに手が伸びてくる。

「どおやら徹底的に教育せんといかんなあ。お前たち、この女を押さえておれ」

肉穴から指が抜けると、粘っこい淫液が糸を引いた。膣口は肉唇で塞がれたものの、クリトリスの疼きを堪えるのが切なく、つらい。

自身の蠱惑的なボディラインを思い知らされながら、昂はおもむろに顔をあげた。

「……高島官長、これ以上4課への侮辱は……うつ？」

そして瞳をぎくりと強張らせ、出かかった言葉を忘れる。

高島がズボンをずり降ろし、そのうえでメタボ体型の腹を出したのだ。肥えすぎた二段腹の下で、奇妙なモノがむくりと起き上がる。

（まさかここで……私を？）

処女の昂にとっては唐突な遭遇だった。蛇のようなシルエツトが鎌首をもたげ、隆々と反りあがる。排泄器官も兼ねているだけあって、見た目からして汚らしい。

「まずいですよ、官長。写真を撮って脅せという話では……議員の孫娘ですし」

「ふん、この女がワシの愛人になりや問題あるまい。誰のおかげで特務4課なんぞが給料

を貰えとるかを、こやつに教えてやらんとな」

取巻きの特務官がたじろいでも、高島は犯罪行為を躊躇わなかった。曲がりなりに治安維持のトップであるにもかかわらず、身動きできない女性に肉の凶器を向ける。

「ま、待ちなさい……いやに決まってるでしょ、誰があなたなんかと」

指など比較にならないサイズに慄き、さしもの鼻も青ざめた。気丈な物言いには張りがなく、抗うよりも逃げる手段を考えてしまう。

（早くここから逃げないと！ このままじゃ、私）

初めて目の当たりにする肉棒は、持ち主と同じくずんぐりと肥えていた。瓢箪を縦長にしたような形で、サオと亀頭がほぼ均等に膨らんでいる。

「無理よ、そんな大きいのが入るわけ……」

うっかり口を滑らせたのを、高島に見抜かれた。

「ん？ もしや奏乃葉君……いかなぞ！ 道理で社会勉強がなつとらんわけじゃあ」

背中で這ってでも逃げたがる鼻の、必死ともいえる拒絶の理由を、ほかの男たちも狡猾に読み抜いてしまう。

「へっへっへ、まさかなあ。寺井と付き合ってるって噂じゃなかったか？」

「あいつはほら、4課の錫城ってやつと妹と付き合ってたよ」

まだ経験がないことを知られたのだ。レイプには消極的だった面々も、にやにやと下劣な笑みを一様にし、課長を後押しする。

「処女は融通が利かんからのう。ワシが卒業させてやる」

男性にとって女性の純潔を奪うことは、優越感の極みらしい。興奮気味に高島が息を荒らげ、先端に引つ掛かっていた包皮の残りを剥き降ろす。

「ち……違うわ！ 私は学生の人に、彼氏と……」

処女であつては連中がますますつけあがるのはわかつていた。しかし経験にないものを明朗なハツタリにはできず、口を濁す。

清純な肉体はイエローテープで雁字搦めにされ、はしたない開脚のポーズを無理強いられていた。お尻や太腿のあちこちでストッキングが裂け、円形の露出を繋ぎ合わせる。

「やめなさい、官長！ もう悪ふざけは、あぐつ、こつちにこないで！」

「ぐひひ！ 本当に経験済みつちゆうなら、そう意固地にならんでもええじゃろ？」

秘裂のピンク色を肉棒は一旦乗り越え、クリトリスのあたりに裏筋を擦り付けた。処女の目には肥大に見える赤黒い亀頭が、意味深なガマン汁を膿む。

昂はかぶりを振つてのけぞり、胸の谷間からネクタイを引きずった。だが嫌がる仕草はかえつて、連中の暴力的な劣情を助長してしまふ。

「官長が羨ましいですよ。俺も出世して、婦人特務官を夜通してハメてやらねえと」

「そうじゃ、男は出世志向がないといかん。お前らもようやく見とれよ、官長の仕事を」
捲れたスカートをがっしりと引つ掴まれた。昂の股座に高島の肥えた腹が乗り、圧迫に

なるほどの体重を掛けてくる。

「これのどこが仕事っ、う……あうう？ いや、ま、まさか……！」

単に彼らはふざけているだけ、本当に実行することはない、などという甘い考えはすぐ役割を失った。自分のものではない何かが、形を持って膣へと侵入してくる。

ズブブ！ ズブッ、ズブズブ！

憎らしい男の、それも醜い排泄器官が、昂の性粘膜を初めて拵げた。

「こいつは、ハア！ なんちゆうキツさじゃ、チンポが曲がってしまいうわい！」

「抜いて！ あなたなんかと、つんぎい、いいいいいッ！」

たまらず昂は歯を食い縛り、痛みに似た刺激に耐える。

怒張は肉唇をくぐり抜け、奥まった膣口を強引にこじ開けた。散々揉みくちやにされて火照った肉体は、否応なしに感度を高めており、淫液の滲出がとまらない。

膣の狭さを知るとともに、男性の乱暴な太さを味わわされる。

「へあっはあ、こんなの裂けちゃう……やめて、んあ、これ以上は！」

身体中に病的な熱が循環し、息も乱れた。鼓動のテンポが跳ね上がり、肉花卉に血液が巡っているのをいくらでも感じてしまう。

柔肌には悶え汗が浮かび、生乳が艶やかな光沢を放った。肝心な場所には立ち入り禁止のテープがなく、処女穴を官長の警棒で調査される。

「うりゃうりゃ！ もうじき卒業じゃぞ、奏乃葉君！ ハアッ！」

香汗で蒸れるほど、肉体は濃厚な色香を振りまいた。昂本人にとつても中毒性のある危

険な香りが、呼吸すら躊躇させる。

「ひぎいい……かつ、あああああああッ!!」

それまで眉間に力を入れていた昂が、はっと瞳を見開いた。声にならない声をあげ、身体を貫くような破瓜の痛みに戦慄する。

ブチッ、ズチズチッ!

全身の筋肉が一斉に反り、のけぞりのポーズが極まった。裂けたに違いない感触が体内を駆け抜け、純潔を奪い取られたことを実感させる。

奥まですっぽりと異物感が届いていた。拡げられた粘膜が熱を帯び、初心な肉体を内側から作り変えていく。

「うあ……あっ、こんなの……」

平衡感覚を失った視界で、男たちの下卑た笑みが遠巻きに旋回した。ざまあみろ、と冷酷な言葉ばかりを面白がって吐き捨て、女性の尊厳を踏みしじる。

「嘘はいかなあ、奏乃葉君! ハア、これは初モノの締め付けじゃ!」

「んあい? い、痛い! 動かさないで!」

結合部の上で高島の腹が揺れると、膣に圧力が掛かった。ペニスの太さと硬さを、締め付けることで感じさせられる羽目になり、嫌でも逃げられない。

女として愛しい男性に捧げるべきパーズンを、面白半分に奪われた悔しさが、ふつつつと湧き上がってくる。

(こんなやつに大切なバージンを……！)

鈍い痛みには耐えながら、昴は醜悪な強姦犯を睨みつけた。

「よ、よくも……んはあつ、これで勝つたと、ふう、思わないで」

けれども膝が笑ってしまつて、強がりには虚勢にしかならない。

抵抗と挿入で疲れ果て、テープに引つ張られるまでもなく脚は股間を広げていた。拘束の時間が長引くほど、手錠を鳴らす回数も少なくなる。

「この期に及んで生意気じゃのう。ぐひひ、特務4課の方針かね？ 諦めの悪さは」

破れかかったストッキング越しの太腿に、高島が無遠慮に手を這わせた。ペニスで快感を得ているらしく、ぐりぐりと挿入を深めてくる。

「これも撮つとくか。ズリネタになるし、お前らの脅迫にはもつてこいだぜ」

「こんなところ、ああ、撮らないで！ 放しなさいっ！」

慣れたくもない挿入感に息を合わせながら、昴はフラッシュを何回も浴びた。

ブラジャーの中央が千切れた巨乳も、ストッキングが綻んだ太腿も、無数の視線に舐めまわされる。肉体は汗だくになって上気し、色香をにおい立たせていた。

忌々しいペニスが昴の膣内を独占し、びくびくと脈打つ。

「大丈夫じゃ、ワシがリードしてやろう。ぐひひっ！」

高島は下品な笑みを歪め、舌なめずりで涎を見せ付けた。生意気な美人特務官を犯すことによりほど興奮しているらしく、排泄が途切れたかのようにハアッと息を吐く。



憎らしい山辻を毅然と睨みあげていても、真琴の唇は素直にチンポを味わっていた。緩みがちな尿口も意識しなければならず、相手に反抗どころではない。

「えぶあ、と、といれに、あむう！ んあつれあ、これが終わつはら、いかえへ」

悔しさを押し殺して懇願すると、山辻がにやりと小癩な笑みを浮かべる。

「いいぜ？ 俺をイかせられたらな」

「あううぐ！ おくにつ、えあ、ンツ、ふかくひないれつてば」

野蛮な太さは咽にも差し掛かり、頻繁に息を詰まらせた。その拍子に鼻水がびゅつと飛び出し、惨めな口奉仕を悔しいほどに潤す。

「つたく、萎えるツラだな。フェラもヘタクソだしよオ。こりや商品にはならねえか」

「なら兄貴、俺らで食つちまってもいいつすかねえ？」

左右と後ろから黒服の連中が加わり、真琴の初心な肉体を物色した。ブレザーの迷彩色から食み出す柔らかな曲線に、彼らの粘っこい手つきが殺到する。

「んむつぶあ、どこを……んぐ！ へあ、さわつへるんですか、へんたひ！」

いくつか払いのけても、すぐに指は五本ずつ戻ってきた。ブラジャーのあった位置で乳果を掴み取り、豊かな弾力を勝手に楽しむ。

「さつきより勃つてんじやねえか？ コレ。どうなんだよ、おい」

「ひあふつ？ たつへなんか、ええお」

乳頭の付け根を指で括られると、痺れが走った。息が苦しいうえにオシッコを我慢する

あまり、疲れ始めた肉体が火照り、だんだん蒸れていく。

オナニーでしか勃った憶えのない乳角はしこり、擦れやすくなっていた。べったりと生乳を触られ、腰の括れ方も念入りに確かめられる。

(イヤなことされてるのに……なんだか、カラダがヘンに?)

強制されたものであれ、チンポを咥えるというストレートな行為に、真琴は得体の知れない興奮を覚えつつあった。肉体が膀胱から過熱し、大腿筋を引き攣らせる。

スカートの中にも手を差し込まれて驚き、背筋が伸び上がった。

「ン、あむう……ふあああつ！そこはだめです！」

「黙ってしゃぶってな！ヘッ、少しはマシになってきたぜ」

肉棒から唇が外れそうになると、山辻がベレー帽ごと真琴の頭を押さえつける。

ミニスカートは捲れてアーミーベルトに引つ掛かり、お尻がもろに視線を浴びた。縞模様のショーツは股布が汗で吸い付き、尻谷にもきつく食い込んでいた。縞模

あられもない太腿は猛烈な尿意のために閉じたがり、がくがくしていた。

「先に脱がせといてやるよ。ハハハ！」

「らめ、つんぐ、そっちは脱がしちゃ……あええむ！」

フェラチオのせいで問答は無用どころか、不可能だ。ショーツをずり降ろされ、悶え汗で蒸れきった股座に肌寒い空気を流し込まれる。

(漏れちゃうっ?)

膀胱を冷やさされ、俄かに腰が震えた。かろうじて奔流は堰き止められたものの、わずかな滲出感が閃き、秘裂を潤わせてしまう。

「おいテメエら、こいつは一応商品だ。ハアツ、前はまだ使うな」

山辻の指示によって純潔だけは守られることが口惜しい。

シヨーツは秘裂にかろうじて生地を残したまま裏返り、太腿の半ばで伸びきった。

しつとりと汗ばんだお尻が、指で擦られるとキュツと鳴る。真琴の手が何回それを払いのけても、きりが無い。

「じよせひを、つえぐう、なんだと、おもっへるんですか？ あなはあ」

「女をどう思ってるか、だと？ なんもん、弱けりや女は便所に決まってるんだろ。おい西^{にし}村^{むら}、そいつのヘッドフォンに……」

無理強いのでフェラチオは言葉通り、真琴の可憐な唇を便器扱いしていた。

(便所だなんて……！)

唇と舌の隙間に割り込む雁太が、どんどん硬さを増す。亀頭の丸みやエラの張り、裏筋の窪みがわかるのは、舐めることに慣れてしまったからだろうか。

「いいか？ へへッ、よく聞けよお？」

ヘッドフォンのマイクを降ろされると、猥音が両方の耳でダイレクトに響く。

ずずつちゆるる！ ちゅぱ！ ちゅつ、ちゅぶぶ！

「んんんっ？ これとっへ、えおぐ、やら……あむっおお！」

すでに濡れ始めている尿口を狭めながら、真琴は望まずとも口奉仕に没頭しなければならなかった。しゃぶることは少なからず自発的な行為であって、いやらしい行為に順応してしまっているのが信じられない。信じたくもない。

(山辻のなんかを……わたしが)

悪漢の股座で跪いて奉仕させられる屈辱と、チンポを頬張る興奮とがせめぎあった。

唇の窄まりが涎を蓄えつつ、雁首の括れにちゅうつと吸い付く。舌で頬を左右交互に膨らませては、亀頭を端から端へと舐めまわす。

「もお、はあむ、いいれしょお？　ぢゅうぶん……えおぐ、い、いっぱひ」

オシッコを堪えるせいで敏感な肉体は、複数の手で執拗なほどまさぐられていた。太腿の内側を、知らない男の手が出たり入ったりする。

「もつとエロい格好させるってのはどうだ？　バニーガールとか」

「わかってねえな。制服つてのが面白いんじゃないか」

上でも下でも、ブレザーの隙間には必ず入り込んできた。ブラジャーの代わりに柔乳を包み込み、品定めするように揉みしだく。

身体中で嫌悪感が徘徊し、産毛が一斉に逆立ちそうだ。

「おっ？　いいぜ、ハア、その調子だ！　わかってきたみたいだなア」

不意に山辻が胴震えを起こし、息を荒らげた。裏筋の側にあつた舌が亀頭を乗り越え、エラの側まで届くのが気に入らしい。

雁太の割れ目から、塩水に近い味のガマン汁が滲む。

精液より小便をイメージしてしまった真琴は、またも吐き気を催した。

「ううぶ、えおつ、ろ……おぐうううッ！」

痛くなるほど眉を顰め、出かかった嘔吐感を飲み込む。

山辻をねめあげる瞳は、きつい性器臭と吐き気のせいで涙ぐんだ。

「えれえお、へあむ、ンツ、えおお！」

抵抗の意志はあつても着々と疲弊させられ、陵辱に耐えることよりも、終わってくれることを考えてしまう。

(はやくしなきゃ、ほんとに漏れちゃう……！)

尿口への注意も途切れがちになっていた。しかし口奉仕が長引くほど焦り、焦るほど長引く悪循環に陥ってしまった。焦燥感は疲労感にすりかわっていく。

「唾えるだけじゃだめだな。じっとしてる？ ハアッ、と」

フェラチオの途中で肉太に後退され、舌のうねりが空振りした。肉厚のエラが濡れた唇を捲り、生温かい唾液をかき出す。

ペニスは口奉仕の以前に増して、力強くいきり勃っていた。反りあがった先で剥き出しの亀頭を腫れ上がらせ、その雄々しさを処女に見せ付ける。

「下から上まで丁寧に舐めろ。休むんじゃねえぞ」

「ろ、へはあ、どんなふうにれすか？」

「そいつはテメエで考えるこつた。できねえなら、ここで小便漏らすんだな」

真琴はこわごわと目を見開き、乱暴そうな勃起ぶりを見詰めた。穿り返すような独特の形が、まだ知らないセックスの淫猥さを想像させる。

(美琴はどんなふうにしてたっけ……信司さんのを、確か……)

手本を思い出し、今度は力ずくで指導されるより先に唇が開いた。男性の味が混ざって飲むに飲めない唾液が零れてしまう。

上手にしゃぶることは、経験のなさを嘲笑されなかったための手段でもあった。

「んああ……あむっ、これへ、いいんれしょう？ おあつぐ」

裏筋へと伸びる一番太い血管を舌でなぞり、鼻まで擦り付ける。やっと餌を見つけた野良犬みたいに。

同時にスカートごと両手を股間に押し込もうとしたが、取巻きの連中に阻まれた。

「おおっと！ 漏れそうだからって、押さえるのはナシだぜ。それより……」

片方ずつ手首を掴みあげられ、腰くらいしか身動きできなくなる。

山辻と目配せしてから、黒服たちもズボンを降ろした。真琴を目当てに膨張したに違いないチンポが、群れとなって獲物を囲む。

「ついでに俺らのも世話してもらおうか。握って扱くんだ、わかるか？」

「ぶはっ、待って！ こんなにたくさん、や、やだっば！」

接近を妨げるには握るしかない。

軍用グローブのおかげで、握ること自体に抵抗は薄かった。しかし数が多すぎて、全部を一遍に相手できない。真後ろの一本はお尻の下へと潜り込む。

「ひはあああ？ そつそこはだめです、うむう！」

「喋ってるヒマがあつたら、しゃぶれ！ 形を覚えろ」

正面からは眉間にサオを押し付けられた。

血管が浮かび走る肉棒を、寄り目になる距離で舐めながら、真琴は左右の二本を握って踏ん張る。どれもグローブ越しに脈動が感じられ、カイロのごとく熱い。

(当たってる！ オチンチンがアソコに……！)

尿の熱が集まっている股間にも、おぞましい勃起の感触が現れた。ショーツの残りを剥がし、お尻のほうから土手へとすり抜ける。

「こうやって抜くんか。いいか？ ハア、あとは自分でやってみろ」

右手と左手では奇怪な反復運動を練習させられた。亀頭には届かない部分を握り締め、シエイクしろ、という指示らしい。

性器臭が濃くなりすぎて、生臭い以前にくらつとくる。

「抜けて言われても……んぶあ、よくわからないに決まつへ、えれえお」

同時進行でフェラチオも続けなければならず、意識はペニスの数だけ分散した。山辻のモノはやけに大きく、息継ぎごとに一回舐めるのがやつとだ。

近いものだけで四本も。

輪に入りきれなかった男は、処女に扱き方の手本を見せている。尿臭じみたにおいは一段と濃厚になり、呼吸器官を犯しまわった。

「パンツがぐしょぐしょだなあ。もう漏らしてんのか？」

「ち、違います！ 漏らしてなんか……あむっ、んぶあっは」

股間は蒸れる以上に濡れ、ずり降ろされたショーツに玉の雫が染み込む。

見えないところで、しかし確実に秘裂は熱いチンポと擦れていた。亀頭が湿った性毛をかき分け、土手の側に出では引つ込むのを繰り返す。

ペニスの痺れは真琴の股間と、両手でも併発し、ますます野蛮な興奮を露にした。

「いいぜ、処女にしちゃ飲み込みが早え。ハアッ、もっとヨダレも使いな」

正面の山辻も息を乱し、より刺激を求めてくる。

「っはあ、こんなこと……あむう、し、したくてしてるわけじゃ……」

舌で唾液を運びつつ、真琴は手首のスナップを利かせた。グローブの生地 of 厚さが締め付けとなり、肉根をのたうたせる。

さらにバイクを運転するのと同じ要領で捻ると、むしろ男のほうが焦り始めた。

「やべえ！ 急にようになってきやがった、ハア、このアマ」

ただでさえ粘着質だった視線が絡みつき、真琴のプロポーシオンを吟味する。性感帯の刺激との相乗効果で、視覚的にも興奮を覚えるのだろうか。

汗だくの生乳に真琴本人の涎が滴り落ちる。

「ン、あうぐ……ぶはっ、もおいいかげんに、ひ、ひてくらはい」

スマタついでに後ろの男に揉みくちやにされ、柔乳が谷間を擦り合わせた。乳頭は疼きを自覚できるほどしこり、指でくにくにと弄られると、甘い痺れが生じてしまう。

(なんでこんな敏感に……? 無理やり、やらされてるだけなのに)

より敏感なクリトリスは肉唇に刺激を妨げられた。快感を得られないもどかしさが脳裏に忍び寄り、真琴の抵抗を、享受でなくとも妥協へと追い詰める。

じきにオシッコも溢れてしまいそう。

「へあっうむ、もうほんとに、あぐ、もれひゃあ」

膨張しつつある尿意にも急かされ、舐めながら両手で扱くテクニクに磨きが掛かってきた。スマタを嫌がったのけぞるのが、自覚なしに惱殺的な仕草となる。

「さつきみたいに啜えてしゃぶれ。ハア、ちゃんと自分でな」

言われた通り真琴は唇をアーンと開け、山辻のペニスを頬張った。啜えるなど嫌だったはずなのに、もう嫌悪感はブレーキにならない。

『ずちゅちゅ! ちゅば! ずちゅばっ、ずずずッ!』

ヘッドフォンが淫らな吸い音を反響させた。音が大きいと、口の中を余計に想像できてしまつて、己の淫らさを思い知らされる。

「ふもっお、ろ、おっひい……ンぐう、はいりきらな、えおおお!」

唇を貫かれた表情は、悔しさだけでなく恥ずかしさもありありと浮かべた。無理のある



太さに吸い付くせいで、鼻の下を伸ばす、みっともない顔つきになってしまう。

(ちゅぱちゅぱって、わたし、やらしすぎ……)

せつかくの軍帽も決まらない。涼やかなショートヘアは紅潮しきつた小顔を包み、口奉仕のリズムに毛先を揃えた。

「上手くなってきたじゃねえか！　ハア、こいつ、本当は経験あるんじゃないの？」

右の肉棒はほぼ垂直に、左の肉棒は付け根から斜めに曲げ、サオを抜き抜く。もしかすると妹より上達してしまったのかもしれない。

火照った肉体は勝手に愛液を溢れさせ、股座の一本も巧妙に刺激した。

「ひえはっ、はやく……トイレ、えああむ、んぢゅうううッ！」

とどめのつもりで吸い上げても、正面の肉太はしぶとい。山辻は真琴のベレー帽をぐりと押さえつけ、少しの拒否も許さなかった。

「もつとだ！　ハアッ、手でやってるみたいなのに、口でもシェイクすんだよ」

両手で扱くのと同じ動きを意識して、真琴は拙いなりにマウスピストンを試みる。

『ぢゅつぢゅる！　ずちゅ、ぢゅぱっ！』

ヘッドフォンの大ボリュームで、リズムの復習も欠かさない。

「えおろおおッ、ン、んぐいい？　へはっ、もお、こんなの……ッ！」

濃厚なおいを嗅ぎすぎて、嗅覚は半ば麻痺していた。刺激臭が目染みるせいで、瞳は山辻を睨むどころではなく、上目遣いで瞬きを繰り返す。

膣内で暴れるチンポが入れ替わり、今度はエラを逆さに擦り付けてくる。

「ひいひいひいッ!? いっききなり、えへあん! こわれる、めくれちゃうう!」

たまらず昴は嬌声を張り上げ、新しい肉棒にも淫液を垂れた。窮屈にうねる膣圧をものとしなない逞しい勃起が、子宮に強い痺れをもたらす。

すでに真琴を輪姦しているせいも、ピストンはせっかちで荒々しい。

「キツキツですな! ハアッ、お嬢様のオマンコは! ロイヤル級に認定いたしますぞ!」

「そんなおくつ、ひぎい! あたっへるの、よわいとこ、あっあはあん!」

濡れそぼった粘膜穴に悦痺をばらまかれた。拡がりつつ擦れるのも、窄まりつつ擦れるのも癖になって、昴の意志では快感を断ち切れない。

(アソコに二本目の……これは三本目? 四本目かも……)

チンポの本数で男性経験を数えてしまっている自分が、女として惨めすぎる。

それでも肉体の昂りに促され、昴は少しでも多くペニスの感触を集めた。パイズリの全体を上げ下げしながら腰をくねらせる。

「えああ、あむ……ぶあつはあ! いひがれきな、ンぢゅう!」

舌の先まで痺れがまわって、甘い快感に肉体を焦がされた。与えられたものがチンポとわかつていながら、アーンと頬張り、陶然とした目つきで舐めまわす。

今啜えているのは、膣内のものより雁首が長いかも。柔乳で挟んでいるのはサオがほかより太い。張り出たエラなら秘書官のものが一番だ。

「わかつちやう……いやらしいカタチが、ぜんぶ、わかつてきちやう……！」

牡のにおいて呼吸器官を満たされ、息継ぎするだけでくらくらする。パイズリ奉仕に灼けた吐息を漂わせながら、昂は被虐的なセックスに耽った。

「あむつちゆ、ぶはっ、はああんっ！ お、おちんちん、またかわっへるう！」
グチャチャ！ ヌチュツ、ズブズブ！ ズブツ！

またペニスが入れ替わり、傘の向きが反転する。直線的な動きは許されず、ストレートヘアの毛先よりも、おへその上下が波打った。

ストッキングと擦れたがる肉棒が、太腿と脹脛の間に飛び込む。

「ほらお嬢様、我々の性欲も処理してもらわないと！ 溜まったままだと、そこの女を犯すレイプ犯になってしまいますよ？」

「だ、だめ……はんらひ、ンツ、しちゃ……せーよくはこれ、っえあ！」

特務4課として彼らにしてやれることは下の世話だった。この場にあるすべてのチンポを自分が受け止めれば、女性市民に被害が及ぶことはない。

仕事熱心な肉体がリズムカルに腰を動かす。

「ひああ、だから……んむうっ、へあつぶ、えお、あむうぐう！」

涎つきの唇は肉棒を締め付ける時だけ窄まり、雁首を集中的に刺激した。ぬらつく舌で亀頭の丸みを撫で、鈴口を穿る。

汗みずくの肉体が過熱するにつれ、淫らな高揚感はより衝動的なものになった。ペニス

の群れと戯れている自分自身がみつともなくて、興奮する。

(おちんちんだらけ……こんなにくさん、独り占めしちゃってるみたい……)

最高のマッサージを受けながら、昴はお目当ての肉棒に濃厚な色気を振りまいた。

「こっちの女も便所の才能に恵まれとるな。どうじゃ、わしのは美味いか！」

「れお……お、おいひいれす……んむつ、おぐうお！」

こうして男子便所選ばれたことが嬉しい。同じ境遇の仲間にも自慢するように、次から次へと肉棒を涎で繋いでいく。

「あはっ、昴さんったらあ！ わたひとつしよに、あん、遊びましょうよお」

真琴もチンポを連れて合流し、同じ一本を舐めあつた。

彼女の吐息は精液臭だけではなく、多量のアルコールを含んでいる。

「お嬢様にもご馳走しませんと！ とっておきの熟成ワインでございますぞ！」

男どもはワインを開け、ボトルの口を昴の尻穴に挿し込んだ。冷たいワインが直腸へと流れ込むや、むしろ粘膜は過熱する。

「へえへえええ？ ふあつ、なにこれ、くる……きひやあう！」

酒に強い昴でも、その一杯でぐらりと目をまわした。

「アナルは吸収力が段違いですからなあ、ふおふおふお！ あとは我輩が！」

腸粘膜がダイレクトに吸収してしまつたらしい。ボトルを空けたら、続けざまに肉太を捻り込まれ、攪拌される。真琴も同じ責めを受けたのだろう。

「きよおそーですよ、昴さあん！ えはっ、先にイったほうが、んえへ、しんじさんとせつくすつてどおれすかあ？ 美琴よりれつたい、ああん、上手なんですからあ！」

ライバルに競争をけしかけられては、負けるわけにいかなかった。

「真琴には、つあん、渡さないわよお？ わたひがさき、さきにいかなかった。たんらもの！ しんじさんの、ひんぼ、ちーんぼ！」

今なら愛しの彼のチンポで悦がってしまえる自信がある。

汗どころか涎まみれの生乳を揉みしだきながら、昴はうさぎ跳び同然に腰を弾ませた。膣穴へと体重を掛けるだけでなく、後ろの剛直でアナルを引きずるのも忘れない。

ズチュ！ ズチャッ、パン！ パンッパンッ！ グチャチャ！

股関節が痺れついても、膝の屈伸は勝手に続く。

「シンジさんとおっしゃいましたか、ハアッ、小さかったらどうします？」

エラ張りの怒張が子宮を連打し、昴に回答を強制した。

「ちっちゃいのは、へあつ、だめなの！ あん、おつきくつへ、ぶ、ぶつとくへ！ わたひのかれひは、これえ！ ぶつといひとお！」

肉棒のサイズで交際相手を決めかねない、スケベなお嬢様に、げらげらと嘲笑が投げつけられる。けれども、笑われることをしているつもりはない。

真琴とともに昴も尻穴を貫かれ、高熱の染み渡った腸粘膜をかき混ぜられた。最大まで拡がった肛門が、モノをひり出しきれずに何回も呑み込みなおす。

「あなるへつくすれ、イク！　いつイクう！　もつと突きまくつへくださあい！」

「ああん！　はあんつ！　そこつ、そこがいいの！　わたしにもお！」

三回と繰り返し返さないうちに病みつきになって、快感に穴を焼かれた。擦れるのが少しでも弱まると、鼻のほうから腰をくねらせ、エラの向きを探す。

暴れるお尻でストレートヘアを混ぜっ返しながら、鼻はチンポ臭に耽溺した。右と左の亀頭を舐め比べては、パイプリの谷間に涎を滴らせる。

「おぐうう……ンっんう！　ろお？　ぷへあつ、わたひのふえら、ツあえぐ」

吸い付きの強さは、鼻の下を伸ばすほど。唇でベニスに引力を感じるかのように、頬のラインを歪め、上目遣いの艶笑を深める。唇の端で食み出す舌がみつともない。

ふたりは騎乗位を並べ、腰の回数を競った。誘うように腰をくねらせる鼻に対し、真琴はやや直線的だが、ピストンに勢いがある。

「まっまたきへ！　きちやいます、へぢゅつ、えはああ！」

「わたしも、もお……あうむ、ン、ぷあつは！　しゅごいのきそお！」

生乳もお尻も汗みどろで、頬と同じくらい赤く染まっていた。唇と胸の谷間、膣穴と肛門でもチンポが競争を始め、鼻と性的興奮をシンクロさせる。

牝痺れはオマンコもアナルも駆け抜け、背筋をのけぞらせて脳天まで達した。肉穴人形の苛烈な締め付けに苦悶し、男たちも息を乱す。

「ほおれ性欲処理の仕事じゃぞ、ハア！　ハア、ハア！」

「しよりひま、っえは、させてえ！ あむぐ、もつとひんぼ、へああああッ！」

手で扱くサオを交換しながら、昴は真琴と一緒に悩乱を極めた。快感が一秒でも途切れようものなら、切羽詰まった表情で摩擦を求め、痺れを駆け巡らせる。

「びくびくっへ、昴さんのも、あん！ ほらあ！ んぶつああ、こんなにまっかに！」

「んひえああ、いいいつ、イク！ イっちゃう、あはっ、ほんとイクう！」

しこった乳頭も雁太に頻繁に弾かれ、快感を閃かせた。

敏感な肉体はどこもかしこも性感帯になってしまつて、チンポだらけの巣穴に自分自身を「挿入」したかのような錯覚さえする。

本命の肉穴は蜜を白濁させ、相手の玉袋まで膣の温度を伝わらせた。

パンパンパンッ！ パンパンパンパンッ！

もつと擦りたい衝動に駆られ、一心不乱に腰を振りまくる。

「えはあつあああ！ きへるう、これ！ おちんぼでイク……いつひやうう！」

肉棒とともに快楽電流が膣を走り抜け、子宮でスパークした。おへそのあたりから飛翔感に打ち上げられ、汗だくの肉体がのけぞりを極める。

真琴も華奢な身体を伸びきらせ、昴とソプラノ調の嬌声を重ね合わせた。

「いいいついつへますう、また！ イク、いいいつイクイク！ しゅずひろまことつ、これよりケツイキ、あへっ、りよーかいいええええええええッ！」

「おおおっおまんこ！ あたっへえ、イクの！ ちんぼっ、ひ、ひーんぼ！ おひりもお

おまんこも！ しゆきなの、おちんぼおおおとおおおとおおおとおおお——！！

ふたり一緒に敬礼を決め、黄ばんだ噴水を散らかす。

ヂョロロロロロロ！ ……ビュルビュル！ ビュルルル！

肉棒の先走り汁もみるみる濁り、次々と噴き上がった。子宮と直腸でもチンポが過熱を極め、その熱源を吐いてばらまく。

ドビュツ！ ビュクビュク、ドビュ！ ドブドブドブ！

甘美な肉悦が頭の中を真っ白に染め上げた。

「あへえええええ…！！ でへるっ、せーえひ、へはっ、だはれまくってるう！」

穴という穴が子種の熱さで蕩けてしまいそうだ。膣もアナルも緊縮し、大好物の勃起を食い締める。締め付けが強くなるほど、汚濁が奥に流れ込んできて心地よい。

「へはあ、しゅばるさんの、あむっふ、もらっひやいまふよお？ おひんちん」

「これはわたひの、んちゅっ、つぎにいれるの！ あっ、あああ……またいつへる！」

仲良く恍惚の笑みを浮かべる、精液4課のザーメントイレ。

半目がちの瞳はとろんとして、淫らな陶酔感をたたえていた。フェラチオを欲張るせいで息継ぎもままならず、スperlマで鼻提灯を膨らませる。

唇は笑う形でわななき、白濁汁を吐くように垂れた。顔面だけでなく、生乳にもお尻にも煮えた牡汁を浴びせられまくる。

二匹の肉便器はアクメに酔いしれ、濃厚な精液臭を堪能した。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
ED DREAM MAGAZINE

公開調教

偶数月
17日発売

二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

コミック
UNREAL
アヴァンチ

08 2013
180yen

Hisasi

気持ちいい天罰
受けてみる?

奇数月
12日発売

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

成年

メガミ
クリシス
Vol.13
cha3CU

今号でラスト!&
今秋リニューアル!

TS魔法少女かかと共に闘む!

マブカレ魔法少女!
chaccu
原作:コトキエ!

奇数月
下旬発売

コインが
まくるアンソロジー!

コミック UNREAL アヴァンチ

メガミ クリシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。